



写真提供: U2 Classical Recording

ザ・シンフォニエッタ 第22回演奏会

2008年5月11日(日)

熊本県立劇場コンサートホール

開場 14:00 開演 14:30

主催: ザ・シンフォニエッタ

後援: 熊本県 熊本県教育委員会 熊本市 熊本市教育委員会 熊本日日新聞社
NHK熊本放送局 RKK TKU KKT KAB FM791 FMK

公式ホームページ <http://www.the-sinfonietta.org/>

Program

モーツァルト／ピアノと管弦楽のためのロンド二長調K.382 (約10分)

ベートーヴェン／ピアノ協奏曲第5番変ホ長調Op.73「皇帝」(約40分)

- 第1楽章 Allegro
- 第2楽章 Adagio un poco mosso
- 第3楽章 Rondo: Allegro

～ 休憩 ～

ベートーヴェン／交響曲第7番イ長調Op.92 (約40分)

- 第1楽章 Poco sostenuto - Vivace
- 第2楽章 Allegretto
- 第3楽章 Presto
- 第4楽章 Allegro con brio

指揮及びピアノ独奏 若林 顕



ごあいさつ

本日は、「ザ・シンフォニエッタ第22回演奏会」にお越しいただき、誠にありがとうございます。また、昨年7月の第21回演奏会におきましても、たくさんのお客様にご来場いただきましたことを、この場をお借りしてお礼申し上げます。

さて、本日の指揮者兼ピアノ独奏者、若林顕氏は、世界各地でピアノ・リサイタルを開かれる一方、国内外の数多くのオーケストラと共演を重ねられ、その音楽に対する真摯な姿勢は、指揮者、オーケストラから厚い信頼を得られています。ザ・シンフォニエッタとの共演は、第20回記念演奏会以来2度目で、前回の演奏もたいへん好評を博しました。

本日前半の2曲はいわゆる”弾き振り”という、専属指揮者なしの形態です。モーツァルト以前の曲ではしばしば行われますが、ベートーヴェン以降の曲では滅多に行われません。演奏上、合わせる難しさもありますが、全曲を通じてピアニストが表現したい音楽を演じられるという利点が大きいですと言えます。

後半、ベートーヴェンの交響曲第7番は、表題こそついていないものの、たいへん人気の高い曲で、ご存じの方も多と思います。ワーグナーが「舞踏の賛歌」と表現したように、「リズム」が最大の魅力です。また、若林氏の”指揮者”という新分野への挑戦も見(聴き)逃せません。

最後になりましたが、幾度となくトレーニングしていただきましたNHK交響楽団ヴィオラ奏者の小野富士氏、在熊フルート奏者の大村友樹氏に深くお礼を申し上げます。

それでは皆様、本日の演奏をごゆっくりお楽しみ下さい。

ザ・シンフォニエッタ 代表 歳田 和彦

Profile

指揮・ピアノ 若林 顕

Akira Wakabayashi



Choshino

表面的な流行にとらわれず、常に音楽の本質に迫る演奏を信条とする若林顕氏は、ラフマニノフなどの作品には、濃いロマンティシズム溢れる劇的な表現力を発揮し、ベートーヴェンやブラームスなどのドイツ音楽では、奥深いアプローチに定評がある。とりわけ、単に音の美しさにとどまらない、自在な音色の表現に、近年、ますますの磨きをかけている。

2002年10月カーネギーホール(ワイル・リサイタル・ホール)にリサイタル・デビューを果たし、好評を博す。同年2月にはトロントにてMusic Toronto Chamber Music Seriesに出演、2003年4月にはシカゴのマイラヘス=リサイタル・シリーズにて大成功を収め、2004年6月にも同シリーズに再び招かれた。2004年1月にはフランスのナント音楽祭に出演、また、2005年5月にはマンチェスターの「ノーザン・カレッジ・オブ・ミュージック」にてマスタークラスを行うなど、国際的な活躍の場を広げている。

東京芸術大学を経て、ザルツブルク・モーツァルテウムおよびベルリン芸術大学院卒業。田村宏、ハンス・ライグラーの各氏に師事。1982年第51回日本音楽コンクールピアノ部門第2位。留学中の1985年、第37回ブゾーニ国際ピアノコンクール第2位入賞。さらに1987年には、弱冠22歳でエリザベト王妃国際コンクール第2位受賞の壮挙を果たし、一躍脚光を浴びる。

日本のみならず世界各地でのリサイタルの他、NHK交響楽団を始めとする国内の主要オーケストラ、スコティッシュ・チェンバー・オーケストラ、パドゥーラ管弦楽団、リンブルク交響楽団、エーテポリ交響楽団、ノールショッピング交響楽団、ロシアナショナル管弦楽団、等とも共演を重ね、その音楽に対する真摯な姿勢は、国内外の指揮者、オーケストラからの信頼も厚い。

ヴァイオリンのコリア・ブラッハー、堀米ゆず子、チェロのスティープン・イッサーリス、堤剛、山崎伸子、クラリネットのカーン・ライスター、オーボエのフランソワ・ルルー、ホルンのラデク・バボラク、ライブツィヒ弦楽四重奏団、ウィーン八重奏団、等との共演など、室内楽にも積極的に取り組んでいる。

2007年秋には「ヴィルトゥオーゾ・プログラムによる3連続演奏会」と題したリサイタル・シリーズを東京にて開催、「・・・若林の音質、とりわけ音の色彩感覚における一層の深化が示されたりサイタルであった。・・・彼にとってのテクニックとは、作品の内面を汲み取り、それを表現するための手段なのだ。・・・」など、数多くの高い評価を得た。近年、ピアノ協奏曲の弾き振りを中心とした指揮活動を開始、新分野への挑戦が注目を集めている。

レコーディングには積極的な取り組みを続けており、2008年からは、オクタヴィア・レコードとラフマニノフのソロ曲全集などをレコーディングする予定となっている。

1992年出光音楽賞、1998年モービル音楽賞奨励賞、2004年ホテルオークラ賞受賞。

現在、桐朋学園大学特任教授、同大学院大学教授として後進の指導にも力を注いでいる。

(2008年4月1日現在)

1986年に結成された小編成のアマチュア・オーケストラ。ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンなどの古典派の曲を中心としながら、ロマン派、近代の曲なども演奏している。アンサンブルを楽しむため、小編成(50人以下)の特性を活かした選曲、演奏活動をしている。

これまでに共演した主な音楽家は、指揮者では本名徹二、山下一史、岩村力、藤崎凡、小野富士の各氏、ソリストでは安永徹(Vn)、堀正文(Vn)、篠崎史紀(Vn)、小野富士(Vla)、O.ボルヴィツキー(Vc)、小林道夫(Cemb)、若林顕(Pf)、合志知子(Pf)、吉田秀晃(Pf)などの各氏で、すばらしい指導者・共演者に恵まれ充実した活動をしている。

2004年11月にはNHK-BS2「おーい、ニッポン 私の好きな・熊本県」に出演し、熊本城前での演奏が全国に生放送された。2006年3月の第20回記念演奏会では、山下一史氏、若林顕氏らと共演。同年9月には「スペシャルオリンピックス・チャリティコンサート」の特別編成オーケストラの一員として、指揮者小林研一郎氏と共演した。

また小編成の特性を活かし、益城町、西合志町(現合志市)、合志町(同)、小川町(現宇城市)等の小規模ホールでの演奏も行って来た。アマチュアでも時間をかけてひとつひとつの曲をじっくり丁寧に仕上げれば充実した演奏ができるという信念をもち、8~10ヶ月の間隔で演奏会を開いている。

管弦楽 ザ・シンフォニエッタ

The Sinfonietta



写真提供: U2 Classical Recording

曲目解説に代えて

～若林さんを囲んでの座談会～ 2008年3月30日「石松茶屋」にて

● モーツァルト／ピアノと管弦楽のためのロンド

— ロンド形式(※)の単純明快な曲ですが、どのように演奏したらいいのでしょうか？

若林さん：モーツァルトの音楽は、演奏家の心の状態がもろにでちゃうんですよ。特にロンドのような超シンプルな曲だと隠しようがないんですね。何が(演奏の)キーポイントかといいますと、いかにストレートに、素直に、楽な状態で演奏するかということ。モーツァルトの音楽には理屈は通用しない。いかに慈しみを持って弾くか、本当に楽しいと思って弾くか、なんですよ。

※ロンド形式とは、ひとつの旋律が、異なる旋律をはさみながら何度か繰り返される形式。

● ベートーヴェン／ピアノ協奏曲第5番「皇帝」

— 若林さん、「皇帝」はそれこそ何回も演奏されているでしょう？

若林さん：そうですね。数えてはいないですけど、50～60回は演奏してると思いますね。

— ピアノからバーンと始まる冒頭がとても印象的ですが、そういう曲はなかなかないですよね？

若林さん：そうですね。後のグリーグやチャイコフスキーのピアノコンチェルトは、少なからず「皇帝」のインパクトを意識しているんじゃないかな。最初のつかみという部分です。

— 「皇帝」というタイトルとあの出だしからすると、威厳があってスケールが大きいというイメージですが、2楽章をはじめ美しく繊細な部分もたくさんありますよね。

若林さん：確かに「皇帝」というタイトルイメージで、ただただ力強いという誤解がありますけれど、ベートーヴェンの作品というのは非常に多様な面があると思います。

— 2楽章は、1楽章や3楽章とはまた違う本当に美しい楽章ですけど、若林さんはどのようなイメージを持ってこの楽章を演奏されるのですか？

若林さん：音楽のイメージというのは具体的には言いにくいですが“いかに静かな気持ちになって弾くか”というところが大事なんじゃないかと思います。

— 「皇帝」には独奏者が自由に演奏する部分、カデンツァがないですよね。

若林さん：そうなんです。「皇帝」にはピアニストが自由に演奏できるカデンツァはなく、ベートーヴェン自身がそれにあたるものを書いています。つまり、ピアニストが自由に作る音が全くないんですよ。自由に演奏されることを拒否した、許さなかったということでしょうか。

● ベートーヴェン／交響曲第7番

— 色々な指揮者やオケの演奏があると思いますが、若林さんはそういった演奏に影響を受けたり、いい部分は取り入れたりすることはありますか？

若林さん：もちろん、いろいろなものを参考にしています。気づかされたり、なるほどと思うことも多々あります。

— 若林さんにとって1楽章のすばらしい点はどこですか？

若林さん：全体を通しての流れ、展開部の緻密さがとにかくすばらしいですよ。あと、あそこまで同じリズムにこだわるというのがね。



— しつこいけど同じことを繰り返される時の高揚感がありますね。

若林さん：そう。そこにいろんな色とか入り方の角度、いろんな語り口があって、いろんな内容があつて・・・だから同じことの繰り返しだからといってポヤッと弾かないことが大切ですね。

— あの2楽章のすごく単純なリズムで始まる8小節間というのは、すごくベートーヴェンらしいですよ。どうしてですかね？

若林さん：まあそうですね、ベートーヴェン以外ありえない和声ですよ。「なんであんなこと思いつくわけ？」と思いますね。

— 単純なテーマなんですけれども、和音(和声)の使い方がベートーヴェン以外考えられない、そういう強烈な個性があると。

若林さん：そうなんです。そして変奏を繰り返しながら壮大に膨らんでいく過程は、巨大な建造物ができる過程を見ているようですね。

— 3楽章ですが、急にフォルテやピアノになったり、テンポも速いし聴いてて爽快感があると思うんですが。

若林さん：3楽章は事細かに変わっていく表情というのを完璧に演奏して初めて、2楽章から4楽章への大事なつなぎの役割が見えてくる演奏になると思いますね。細部をきっちり演奏した上での流れが大切だと思います。

— 4楽章はなんといっても凄まじいんですよね。

若林さん：とにかくあれはもうエネルギーの発散です。オープンで力の抜けた明るい音質になっていることが大事です。もちろん1楽章から3楽章までの積み上げの上に4楽章があるということですけど。そういう秩序の上での終楽章という位置づけですね。

● 「弾き振り」というスタイルについて

— 今回若林さんは独奏者兼指揮者という一人二役の「弾き振り」というスタイルで演奏されますが、オケにとっては指揮者がいない分、ソリストと対等な立場で、音楽を自分達で創っていかねばならないという難しさを感じています。

若林さん：一番大切なのは、せつかく指揮者がいないんですから直でやりましょうよ、ということです。そこが指揮者のいないメリットなんです。だからオケの皆さんにも表現する勇気を持っていただきたいと思いますね。室内楽を演奏するような自発的な気持ちで演奏していただければとても楽しめると思います。とにかく能動態でこちらへ仕掛けて欲しいんです。積極的な表現をしましょうよということです。ザ・シンフォニエッタの皆さんならやってくれると信じています。

● あとがき

“曲目解説を若林さんに語っていただく”という趣旨のもと、食事の席でざっくばらんにお話していただきました。紙面の都合上割愛させていただきましたが、ドラマ「のだめカンタービレ」での「ラブソディ・イン・ブルー」の演奏エピソードに至るまで、約3時間熱く語っていただきました。若林さんの気さくなお人柄と素晴らしい音楽観に引き込まれたひとときでした。若林さん、ありがとうございました！

Members

コンサートマスター

大宮伸二

第1ヴァイオリン

浦中有紀
定永明子
多賀直彦
多賀美紀
東家容子
富奥史子
益田久美
柚原三弥子※

第2ヴァイオリン

大宮協子
岡本侑子
木村雄
清永育美
清永健介
瀬畑健雄
武智久子
廣瀬卓
廣瀬英
松本晋弥
山口祐子

ヴィオラ

和泉希代子
磯部哲也
太田由美子

田代典子

辰野陽子※

中澤康子

毎床一寿

チェロ

坂本一生

関栄

瀬畑むつみ

東家隆典

ハンダーソン陽子

裕本幸二

馬原ひろみ

コントラバス

竹内尚志

歳田和彦

中川裕司※

フルート

泉由貴子

中澤邦男

オーボエ

橘徹

松本聡子

吉田千草

クラリネット

福島由貴

府高明子

ファゴット

上田宏

柴田義浩

ホルン

伊藤友美

川崎華奈

坂口学※

トランペット

出口文教

福島敏和

山口博子

ティンパニー

高宗邦子

トレーナー

山本俊之

※は賛助出演

次回演奏会のお知らせ

熊本大学合唱団

~Freie Kunst Gemischte Liedertafel~

藏岡多可士常任指揮50周年 第63回定期演奏会

日時：2008年11月24日(月・振休) 14時開演

場所：熊本県立劇場コンサートホール

曲目：ブラームス/ドイツ・レクイエムOp.45他

指揮：藏岡多可士

ソプラノ：山本明貴子

バリトン：水野洋助

合唱：熊本大学合唱団

管弦楽：ザ・シンフォニエッタ

主催者からのおねがい

- 1 ホール内での喫煙、飲食はかたく禁じられております。
- 2 携帯電話等の電源、時計のアラームはお切りください。
- 3 小学生未満の方のご入場はご遠慮ください。
また、お子様がお静かにできない場合は、2階「親子室」をご利用ください。
- 4 演奏が始まりましたら、ホールの移動、座席の移動をお控えください。

以上、気持ちよい演奏会にするために、ご協力お願いします。

本日は、ザ・シンフォニエッタ第22回演奏会にご来場いただきまして、誠にありがとうございました。

